

大家族的共生施設「友愛の森」②

園長 児嶋 草次郎

宮崎も9月に入りました。夕方、園庭のあちこちで時間の経過を惜しむかのように、ツクツクボウシが鳴いています。今年もすごく暑い夏でした。まだまだ残暑は厳しいのですが、8月から抜け出ただけでも、気分的に安堵します。コロナ感染症も、新しい株が園内にもついに侵入し、7月末から8月上旬にかけて感染が広がり大変でした。しかし、幸いに皆、後遺症もなく、それぞれに二学期、登校を始めています。岡山孤児院時代は、コレラや赤痢で多くの子供たちが亡くなっています。その時代に比べると、医学の進歩した現代に生かされていることに、感謝の気持が湧いて来ます。職員たちそれぞれに大変でしたが、その危機を乗り切った踏ん張りにも感謝です。

回りに目をやると、桜の木は早々と落葉を終え、すでに来年に備えようとしていますし、柿の木も、どンドン葉を色づかせながら落葉を始めています。花壇のカンナ、マリーゴールド、サルビア、メランポジウムは、この厳しい暑さと雨の少ない夏によく耐えて来ました。これから秋の深まりに合わせて、たくましく花を次々に咲かせてくれることでしょう。

ところで、今回は、去年の「友愛通信」10月号に書かせていただいた「大家族的共生施設『友愛の森』」のパート②を書かせていただきます。あれから1年、世の中も随分変わって来ているようにも感じます。ロシアがウクライナに侵略し、戦争を始めたことは、大きなショックでした。半年たっても終わらず、原子力発電所もその戦闘にまきこまれそうになっており、ますます混迷化して来ています。これは国連の常任理事国がやり始めた戦争で、地球の未来が危ぶまれます。安倍元首相の暗殺も恐ろしいものでした。このようなテロが日本社会で頻発するようになれば、日本という国が崩壊していくのでしょうか。そうさせないために、我々は何をすべきなのか、アレコレと考えさせられます。

グローバリゼーションは、一つの幻影であったのかもしれませんが。歴史や文化や価値観を超越して世界が一つになっていくということは、今の地球レベルでは難しいということなのでしょう。西側のリーダーであるアメリカを何でもかんでもマネしていくような国策は、かえって敵を作ってしまうのかもしれませんが。

私たちは政治家ではありませんので偉そうなことは言えませんが、単に軍備に頼ろうとするのではなく、日本独自の歴史や文化をしっかり守る、そういう視点が、状況に流されないためにも必要だと感じます。何もかにもが個人主義の欧米の文化に染まっていく流れの中で、日本独自の大家族的共生施設「友愛の森」を作ろうとする試みが、これからの未来へ向けて、日本人の尊厳を守る一つの実験になるのかもしれませんが。新たな家族的絆と地域的・和・輪を作る試みです。

昨年は、一つのイメージとして書かせていただきましたが、今回は、より具体的にその構想を書かせていただきます。実は、日本財団が「第2回日本財団みらいの福祉施設建築プロジェクト」を募集しており、それに応募することにしましたのです。昨年も一応出してはみましたが、時間もなく十分に練られてはいませんでしたので落選しています。

日本財団の「みらいの福祉施設建築プロジェクト」の募集チラシには次のようなことが記されてあ

りました（開催趣旨から）。

「近年、少子高齢化や多様性の尊重、コミュニティの希薄化といった社会背景の変化に伴い、社会福祉施設は多機能化や地域貢献の動きが活発となり、地域福祉を担う拠点としての役割が求められています。社会福祉施設が、地域社会に開かれた魅力ある場所として認知され、まちづくりの核となっていくためには、建築デザインが重要な要素となってきます。デザインは環境をつくり、環境はサービスやケアと密接に結びついているからです。本プロジェクトは、地域社会に貢献し、地域社会から愛され、地域福祉の拠点となる社会福祉施設をめざして、事業実施団体と設計者の協働による建築デザイン提案を含む建築関連助成事業を募集する、日本財団が新たにスタートする助成プログラムです。」

一事業あたりの上限額は5億円です。5億円もあればまとまった事業もできます。石井記念友愛社の到達目標は「友愛の地域社会づくり」であり、私たちは、常に新たな地域の福祉ニーズに注目し、地域から愛されるような拠点づくりに挑戦してきました。日本財団は、高鍋町内にデイサービスと小規模児童養護施設との複合施設を建てる時に資金援助してくださっていますし、車両も何台かいただいています。このプロジェクトに応募しないわけにはいかないでしょう。

ちょうど、高鍋町内の石井記念明倫保育園が老朽化により改築の時期を迎えていますので、その改築を軸に、それに新たな施設を共生させる形で複合化させ、未来型の開かれた施設を提案することにしました。その全体名称を「開かれた大家族の共生施設『友愛の森』」と致します。年齢を超え、障がいの有無を越えて、互いに支え合う大家族のような館（やかた）づくりです。

まず場所ですが、現在の保育園は、高鍋明倫文化発祥の地と言ってもよい文化的に恵まれたゾーンにあります。江戸時代参勤交代が出発した武家屋敷通り、藩校明倫堂の跡地に建っている県立高鍋農業高校、その高校を囲む高鍋城のお堀、城跡（舞鶴公園）も含めて、図書館、美術館等、すべて保育園の散歩コース内です。これらの文化教育施設は、保育園の西側になりますが、東側は、町の昔からの商店街で、一番街から中央通りに向けて一直線に江戸時代からの商店街がつらぬいています。そういうこの町の一等地に明倫保育園はあるのです。平成18年に、町立保育園を民間移譲で経営を引き継いだのを機に、歴史を継承するため名称を「石井記念明倫保育園」と変えました。もちろん、この高鍋の藩校「明倫堂」を初め、豊かな精神文化に子供たちが触れてほしいという強い願いがこめられています。

民間移譲と言っても土地は町有地ですので、その隣接地、旧黒木清五郎邸付きの土地を手に入れることができました。黒木氏は肥料販売等で財をなした資産家で、石井十次もお世話になったことがあるようです。保育園園舎を建てることのできる十分な広さがあります。旧黒木邸は、大正ロマン風のりっぱな木造2階建の文化財級の建物で、この建物を次世代に残すことが、この土地を購入する際の条件でした。この建物と保育園とをつなぎ、一階はカフェに二階はギャラリーにする予定です。保育園の子供たち、また付属の学童の子供たちにとっては、地域の方々との交流の場となります。農業高校の生徒たちと交流（以前は田植えも一緒にさせていただいていました）したり、図書館に行って、読み聞かせを聞いたり、美術館で絵を鑑賞したり、すばらしい文化的環境を今後も維持していかなければなりません。まず感性豊かな子供たちに育てることが、保育園の使命です。

この文化的環境にプラスして、人的環境をさらに充実させようとするのが複合化のねらいです。建物としては4階建てになる予定です。1階には保育室を設けません。これは、南海トラフの大地震津波等から子供たちを守るためです。保育園周辺には、ハザードマップによると3mほどの水が押し寄せると想定しています。保育室、学童保育室は、2階と3階です。

3階の面積の半分ほどには、小規模児童養護施設仮称「あきづきの家」が入る予定です。小規模児童養護施設は、石井記念友愛園の「じゅうじの家」、石井記念有隣園の「よしこの家」に続いて三つ目です。じゅうじの家は、石井記念にしん保育園、じゅうじの家デイサービスセンターとの複合施設として、平成18年に設置しています。16年間の実績があります。職員が住み込みで働いているので、いつでもファミリーホーム（里親型グループホーム）にできるのですが、あとは宮崎県の決断次第です。

今までは並列型の共生でしたが、今度は立体型です。小規模児童養護施設を複合化することのメリットにはいくつかあります。ここでは三点あげておきます。

- ① 家族的に町の中で地域の子として育てると言えば聞こえはいいのですが、実質的には職員が3人で運営していかねばなりません。一日は24時間あるのだし、8時間労働で、職員にも休日を保障していかねばならないわけで、一人で子供を見る時間が多くなります。思春期真っ盛りの子供たち6人を若い職員が指導するというのは現実的には困難なことです。町の中に一軒ポツンとあるより、複合化することで、隣の施設の職員から随分助けてもらえます。これこそ共生・共助です。
- ② 子供たちにとっても、多くの大人から見守られることは心強いことです。昔の長屋的な関りができて、互いに挨拶したり声をかけたりする中で、子供たちの心が養われていきます。以前にも書かせていただいたことですが、じゅうじの家に住み隣のデイサービスのお年寄りと一緒に食事を重ねた子が、高校では福祉科で介護福祉士の資格を取り、大学では作業療法について学び、現在、お年寄りの施設で働いています。保育園でボランティアをしたり、アルバイトをしたりも繰返しして来ています。
- ③ これから考えておかねばならないのは、災害時の備えでしょう。保育園では、親御さんに子供さんをお返しすればそれで責任を果たしたことになりますが、児童養護施設の場合、24時間365日、子供の命を守る責任があります。夜間に津波でも来れば一人の職員で6人の子供の命を守ることは困難をとまいません。複合化することで、そのリスクを減らすことができます。様々な災害の発生の多い現代、国は複合化、共生化を推奨していくべきでしょう。

4階には、お年寄り用のシェアハウスを作りたいと思います。定員は9人です。今までは、日帰りデイサービスのお年寄りと子供たちとの交流でしたが、今回は一歩進めて、同じ屋根の下で、暮らすことになります。シェアハウスですから、まだ介護サービスを受けておられない、独身の高齢の女性、男性です。人生100年時代、70代80代になっても社会貢献したいと思われている方は多くおられます。また、独身をつらぬいた方、配偶者をなくされ一人で生活されている方も、多くおられます。田舎の一軒家や大都会のビル群の中で一人で老後を迎え、今後に不安を持つ方もおられるでしょう。そういう方々に集まっていただき、言わばホテル生活をさせていただきお互い支え合いながら、余裕のある時に、保育園の子供たちに読み聞かせをしていただいたり、小規模児童養護施設の子供たちと触れ合ったりしていただきます。日本の伝統的な大家族的な共生の生活です。

今後、団塊の世代が次々に後期高齢者になっていきます。人口減社会であり、人材確保がどこも深刻な課題です。また地方はどんどん過疎化しており、インフラも老朽化してきています。町をコンパクトに集約化していく時代でもあります。公共施設を今後作る時は、常にこの複合化、共生化は、行政主導で考えなければならないのではないのでしょうか。昔からの縦割り・縄張り思考から包括・共生の思考に、まず行政が脱皮しなければなりません。

私たちは、一つのモデルを示してみたいのです。核は福祉施設ですので、今まで保育や児童福祉に

関わって来られた方、大歓迎です。車の運転を止めてしまっても、同じ建物の中ですので、体が動く限り、社会貢献を続けることができます。やがて、体が自由に動かなくなったら、外部の介護サービスを利用しながら生活を続けることもできます。昔の大家族は、若い夫婦が外で働き、孫や曾孫の面倒は、お年寄りがみていたのです。そういう伝統的生活文化を福祉施設が取り入れ、現代的な形で再生させてもよいのではないのでしょうか。法律的には福祉施設ではないかもしれませんが、今後、過疎化・高齢化の進む地域社会に必要な支援施設でしょう。

最後に障がい者就労支援です。旧黒木清五郎邸は、改修して一階をカフェに、二階をギャラリーにすると書きました。ここで働くスタッフに障がい者の方々に加わっていただくのです。この黒木邸の隣に、もう一軒、すでに改修を終えた建物もあります。現在、石井記念友愛社の障がい者就労支援B型事業所「茶臼原自然芸術館」で働いている利用者の方々が生産している農作物、染色衣類、機織り物等を販売します。機織り機を持ちこんで実演するのもよいでしょう。染色を含めて町の関心を持つ方々にワークショップを開くこともできます。農業高校がすぐ近くにあるので、建物内外の園芸や染色・機織り等、生徒たちとコラボレーションすることもできます。若い感性で何か新しいものが生まれると思います。そこに保育園や小規模児童養護の子供たちが参入すれば、すばらしい感性の教育ができます。高齢者の中にも関心を持つ方はおられるでしょう。カフェや販売、機織り・染色に参加される方も出て来るでしょう。スタッフに加わっていただければ強力な味方になります。地域の方々もまきこみながら、農・職・商・福の連携が生まれていくのです。

そういう環境の中で重要なことは、障がいを抱えた方が、自信と誇りを持ってこの町で生きていける場を確保するということです。これこそが、年令、障がいの有無を越えて開かれた家族的共生施設「友愛の森」の目標です。新しい形の地域づくり、村づくりとも言えます。

「友愛の森」と書きましたが、この拠点をスタートとして、関係機関、他の福祉施設等と連携しながら、この「友愛」の拠点を増やし「森」にしていく働きかけが必要です。私は、コロナ後のこの町のルネサンスだと位置づけています。とは言っても、日本財団のプロジェクトに選ばれないとこの構想は実現しないのですから、支援者の皆様、選ばれるように、お祈りよろしくお願い致します。また、人が集まらないと建物ができて事業は始まりませんので、賛同される若い方々、高齢者の方々、御参画のほどよろしくお願い致します。